様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６３９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２９８０

研究課題名（和文）英語教員養成課程における英語力および指導力の統合型自律的学修プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing Autonomous Learning Programs to Enhance English Skills and Teaching Skills of University Students in the Pre-service Teacher Education

研究代表者
工藤　洋路（KUDO, Yoji）

玉川大学・文学部・准教授

研究者番号：６０５０９１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究計画の1つである「授業データベースからteacher talk corpusを作成する」ことは、研究当初からデータ収集等を行い、EasyConcというソフトを用いて、検索可能なフォームとして完成させた。もう1つの研究計画の「大学の英語教員養成課程の中で重点的に育成すべき能力を抽出する」については、教育実習を行った学生に対してアンケート調査を2年間にわたり実施することで、その能力を明らかにすることを試みた。両研究により、英語教職課程で学習をしている学生の英語力および英語指導力の現状および課題が分かり、その結果、英語教職課程で学習すべき内容が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在、小学校における英語科の必修化、学習指導要領で求められる授業を英語で進める必要性、大学入試改革など、さまざまに変化する英語教育の中で、この変化に対応できる英語教員の養成は必須となっている。一方で、大学の教員養成と中高の指導の実態が合っていないことなどが指摘されている。このギャップを埋めるため、本研究では大学における英語教員養成で指導が求められる内容を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：One of the two main purposes of this study was to develop "teacher talk corpus" based on the utterances made by English teachers during their English classes. We collected the data for three years, and completed the "teacher talk corpus" using the software called EasyConc. The other purpose of this study was to clarify English skills and teaching skills that university students in the pre-service teacher education should enhance. To this end, the questinnaire was administered to students who finished a three-week practicum at junior and senior high schools. From these two kinds of research, what skill training should be provide to university students in the pre-service teacher education became clear.

研究分野：英語教育学

キーワード：教員養成　教育実習　teacher talk　授業を英語で行うこと

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2015 年 6 月 5 日に文部科学省が公表した「生徒の英語力向上推進プラン」の中の「小・中・高校を通じた改革のための取組」において，「教員の英語力・指導力向上等」が掲げられている。英語教員が備えておくべき英語能力の目標値は，2002 年に公表された「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の中で「英検準１級，TOEFL550 点，TOEIC730 点程度」と明記されており，現在に至っても，次の通り，新しい試験に関する基準が追加されてはいるが，その目標値は変更されることなく，「英検準１級以上，TOEFL の PBT550 点以上，CBT213 点以上，iBT80 点以上または TOEIC730 点以上」とされている。この能力は，2003 年公表の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」の中で，「英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る授業を行うことのできる英語力」と定義されており，中学・高等学校の両方において英語による言語活動のより一層の充実が掲げられている現行の教育課程においては，とりわけ，英語教員に必須の能力と言える。2014 年に実施された公立の中学校および高等学校の教員に対する調査では，「英語能力に関する外部試験を受験した経験のある英語担当教員」のうち，この英語能力に達している中学校教員は 38.3%，高等学校教員は 72.2%であった。中学校教員では約 6 割，高等学校教員では約 3 割が，必要な英語能力に達していないと言えるが，外部試験の受験経験がない教員は中学・高等学校の両方の教員ともに約 25%であったことから，十分な英語能力を持ち合わせていない教員は潜在的にはこれより多いと推測される。同調査では「授業における英語担当教員の英語使用状況」も明らかになっているが，中学・高等学校の教員で「発話の半分以上を英語で行っている」教員の割合が 40%～50%程度にしか達していないことは，教員の英語能力が十分でないことが原因の 1 つと考えられる。2013 年に公表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」によれば，今後の英語教育の在り方として，中学校では「授業を英語で行うことを基本」とし，高等学校では「授業を英語で行うとともに，言語活動を高度化（発表，討論，交渉等）」することなどが挙げられていることから，英語教員に必要な英語能力はより高いものになることが予測される。

英語能力とともに英語教員に必須の能力として挙げられる指導力については，その下位能力を JACET 教育問題研究会（2014）が『成長のための省察ツール 言語教師のポートフォリオ』の中で CAN-DO の形式で提示している。このツールでは，「教職履修学生にふさわしいもの，初任教師にふさわしいものに分類」した「英語教職課程編」が提示されており，大学の英語教員養成課程のカリキュラム編成および各授業のシラバス作成などにとって非常に有益なものであると言える。今後の課題は，このツールで示されている各能力を精緻化するための追研究を行い，より精緻化された上で記述された各能力を，大学の英語教員養成課程で開講されているどの授業で主に養成すべきものなのかを明確にすることで，必要な能力を十分に育成できる学修プログラムを整えていくことである。

このような背景から，大学における英語教員養成課程では，中学・高等学校の英語の教員免許状を取得する学生がより高度な英語能力および指導力を身につけられるような学修プログラムを構築することが課題となる。大学生の学修については，「事前の準備，授業の受講，事後の展開を通した主体的な学びに要する総学修時間の確保が重要」（中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議，2012）とされていることから，学生の能力育成のための学修プログラムは，授業と連動しながら，学生の主体的な学修を促し，学修時間の確保が保証されるものでなければならない。このような学修プログラムが，英語教員養成課程において開発されることが望まれる。

２．研究の目的

本研究の目的は，大学の教員養成課程において，中学校および高等学校の英語教員に必要な英語能力および指導力を育成するための学修プログラムを構築を目指すことである。プログラムの構築に先立ち，研究の第 1 段階では，英語教員に必要な英語能力および指導力を CAN-DO の形式を用いて具体化することを目的とする。第 2 段階では，CAN-DO 形式で記述された能力の中から，特に大学の英語教員養成課程の中で重点的に育成すべき能力を抽出する。そして，第 3 段階では，英語教員に必要な基礎的な英語能力および指導力を大学卒業時に保証できる学生を育成するために，第 2 段階で抽出された英語能力および指導力を統合的にそして自律的に学修が可能となるプログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 英語教職学生のための teacher talk corpus の開発

研究の 1 つ目として，英語教職課程の学生の英語教職に繋がる英語力の課題を抽出するために，教育実習などにおいて，英語の授業を実践した際に，英語での発話で困難が生じた内容をデータベース化し，teacher talk corpus を構築する。つまり，「英語で言いたかったけれども言えなかった表現」をコーパス化し，適切な表現と共に掲載する。これにより，英語教職学生の英語教員として必要な英語力の分析が可能になり，また，利用可能なデータベースとして公開することで，彼らの英語能力の向上が実現可能な学習媒体になる。

(2) 英語教職学生の指導力の現状と課題の抽出

研究の 2 つ目として，英語教職課程の学生の英語の指導力に関して，必要なスキルや知識を抽出するために，教育実習を終えた学生に質問紙調査を行い，それまでに大学の教員養成課程で育

成されたスキルや知識が，現場実習でどの程度役に立ったか，また，大学でさらに学習すべき事項として何が挙げられるか，などを検証する。この調査結果により，英語教員養成課程のプログラムの改良に資することになる。

４．研究成果

(1) 英語教職学生のための teacher talk corpus の開発

英語教職学生のための teacher talk corpus の開発は，EasyConc というソフトウェアを用いて，右図で示した 6 つの手順で実施した。また，このソフトウェアには，検索機能として，1) English（英単語から検索），2) Japanese（日本語から検索），3) Category（ドロップダウンリストに，想定指導学年が表示され，学年別に選択可），4) Category 2(ドロップダウンリストの 14 項目の場面・状況・活動場面から選択可)，5) Compound Retrieval（複合検索で検索）の 5 つの検索機能を搭載した。

この EasyConc for Teacher Talk を開発する途中で，英語教職学生が英語の授業の中で使う「英語」についての課題と現状が明らかになった。例えば，基本動詞を含んだ表現を話すことに不慣れである点が挙げられる。具体的には，look，make，talk，say，take といった基本動詞について，対象者の英語教員養成課程の学生は，授業の活動場面において臨機応変に基本動詞を用いた表現を使いこなせていなかった。彼らが教育実習の授業や模擬授業の中での指示として，Don’t look at your worksheet when you talk to your partner. Please keep eye contact. や Make pairs and work together.といった英語を話す必要があったが，これらの英語がうまく言えなかった学生がいることが判明した。こうした表現を英語でうまく言えない理由として，個々の語は言えても英語の表現（チャンク）として言えないことが考えられる。例えば，「今度は縦ペアで練習して下さい」と言うとき，「ペア」，「練習して下さい」は個々に言えても，まとまった英語の表現（チャンク）として言えないということである。チャンクとして，練習をしなければ，Work in pairs with the student behind you.という英語は発信できない。この課題を克服するためには，基本動詞を含んだ表現を話すことに慣れるトレーニングを行う必要がある。具体的には，教育実習前に履修する英語科教育法の授業の中で，WordFlash のようなソフトウェアを用いて，英語を見たら日本語の意味が分かる（receptive retrieval），日本語を見たら英語で言える（productive retrieval）といったトレーニングが必要であると言える。

teacher talk corpus を開発することで，英語教職課程の学生が自身の teacher talk の能力を上げるツールを提供できただけではなく，彼らの英語力の現状と課題が明らかになったことがこの研究の成果と言える。

(2) 英語教職学生の指導力の現状と課題の抽出

英語教職課程の学生の英語の指導力に関して，必要なスキルや知識を抽出するために，教育実習を終えた学生に質問紙調査を 2 年間にわたって行った。2018 年度は 61 名（A 大学 16 名／B 大学 8 名／C 大学 37 名），そして，2019 年度は 50 名（A 大学 18 名／B 大学 5 名／C 大学 27 名）の学生からの回答があった。質問紙調査で尋ねた具体的な質問項目は，主に以下の３つの観点から作成した。

- 本研究の代表者および分担者の４名がこれまでの大学での実習生の指導から共通して課題だと認識している事項（例：大学の授業で学んだ「指導手順」や「授業の展開」を実習の授業で行ったかどうかを問う項目）
- 文部科学省の最近の英語教育に関するアンケート調査等で頻繁に取り上げられている事柄（例：英語の使用割合や言語活動を実施している時間の割合を問う項目）
- 上記で示した，大学の教員養成課程で指導している内容が中高の学校現場に即していないという問題点が実際に存在しているのかどうかを問う項目（例：英文和訳に多くの時間を費やしたかどうかを問う項目や，大学でもっと学んでおきたかったことを問う項目）

具体的な質問内容は次の通りである。

＜選択式①＞
質問：教育実習での英語の授業について，次の事柄はどのくらい当てはまりますか？

回答：「かなり当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」から１つを選択

1	英語の授業を行うことは楽しかった。
2	実習期間を通して，満足できる授業ができた。
3	研究授業では，満足できる授業ができた。
4	実習前までの模擬授業の量や回数は，十分であった。
5	教育実習で授業をする上で，自身の英語力は十分であった。
6	授業全般では，自由に指導案を考えることができた。
7	研究授業では，では，自由に指導案を考えることができた。
8	授業全般では，コミュニケーション活動を十分に実施できた。
9	授業全般では，文法の指導を十分に実施できた。
10	授業全般では，単語の指導を十分に実施できた。
11	授業全般では，英文和訳の指導に時間を多く費やした。
12	授業全般では，音読を多く行った。
13	大学の授業で学んだ「指導手順」や「授業の展開」を実習の授業で行った。

＜選択式②＞
質問：教育実習の授業での英語使用割合等について，該当するものを選んでください。
回答：「0～20%」「20%～40%」「40%～60%」「60%～80%」「80%～100%」から１つを選択

14	授業全般では，英語使用の割合はどのくらいでしたか。
15	研究授業では，英語使用の割合はどのくらいでしたか。
16	英語の授業での，教師の英語使用の理想的な割合はどのくらいだと思いますか。
17	授業全般では，先生が説明や解説をしている時間の割合はどのくらいでしたか。
18	授業全般では，生徒が言語活動を行っている時間の割合はどのくらいでしたか。

＜記述式＞
- 実習校の指導担当の先生から，授業中の教師の英語使用について何か指示がありましたか。（具体的にどんな指示でしたか。覚えている範囲で記述してください。）
- 実習校の指導担当の先生から指示されたり，助言されたりしたことで，役に立ったことを記述してください。
- 実習校の指導担当の先生から指示されたり，助言されたりしたことで，違和感を感じたこと，自分の考えと異なると思ったことを記述してください。
- 大学の授業で学んだことで，実習の中で役に立ったことを挙げてください。
- 大学の授業でもっと学んでおきたかったことを挙げてください。

これらの質問紙調査について，その結果の概要を以下に示す。

次の表は，授業で英語を使った割合，また，説明や解説をしている時間の割合を示したものである。大学の英語科教育法の授業では，高校の学習指導要領に記載されているとおり（新学習指導要領では中学校にも記載），「授業を英語で行うことを基本とする」ことを考慮して，英語で進める授業の練習を多く行った。2019 年度の高校での実習生の方が，授業での英語使用の割合が多く，解説の時間が少なかったことから，学習指導要領に沿った授業展開を大学の授業でトレーニングすることの意義が高まったと言える。

項目	校種	年度	0-20%	20-40%	40-60%	60-80%	80-100%
授業全般では，英語使用の割合はどのくらいでしたか。	中	2018	2.4	26.2	31.0	26.2	14.3
		2019	3.2	25.8	41.9	22.6	6.5
	高	2018	15.8	36.8	21.1	5.3	21.1
		2019	11.1	16.7	27.8	33.3	11.1
授業全般では，先生が説明や解説をしている時間の割合はどのくらいでしたか。	中	2018	2.4	50.0	38.1	9.5	0.0
		2019	3.2	22.6	61.3	12.9	0.0
	高	2018	0.0	10.5	57.9	21.1	10.5
		2019	5.3	31.6	36.8	15.8	10.5

（数値はすべて%）

次の表は，授業で英文和訳をどの程度行ったかどうか，また，大学の英語科教育法の授業などで学んだ指導手順や授業の展開を教育実習の中でどの程度用いたかについての結果が示されている。2019 年度の高校での実習生の方が，大学の授業ではその指導方法についてあまり触れることがない英文和訳については，教育実習ではあまり行わず，大学で学んだ指導手順を用いていた。これも同様に，大学での学習が教育実習で活かされている項目である。したがって，今後の英語教職課程でも引き続き，指導を行っていくべき内容であると言える。

項目	校種	年度	かなり当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
授業全般では，英文和訳の指導に時間を多く費やした。	中	2018	4.8	16.7	38.1	40.5
		2019	6.5	12.9	35.5	45.2
	高	2018	31.6	10.5	31.6	26.3
		2019	15.8	15.8	26.3	42.1
大学の授業で学んだ「指導手順」や「授業の展開」を実習の授業で行った。	中	2018	31.0	50.0	19.0	0.0
		2019	32.3	38.7	19.4	9.7
	高	2018	26.3	47.4	26.3	0.0
		2019	31.6	52.6	0.0	15.8

（数値はすべて%）

一方で，大学での学習と現場での実習のギャップについては，以下のような点について，実習生が違和感を得たことが報告されている。次の事柄は，実習先の先生から実習生が指導を受けた際に言われた事柄である。

- コミュニケーション活動は必要ない。
- 教科書を無視してもよい。
- 字は注意しなくてもきれいに書けるようになる。
- 予習の段階で内容理解は終わっている。
- 音読は理解の前に行う。

大学の教員養成課程では，このようなギャップにも配慮した上で，実習に送り出すことが必要であると言える。

また，次の内容は，大学の授業でもっと学んでおきたかったこととして、実習生が報告したことである。

- ICT（デジタル教科書）を活用した英語の授業
- ワークシートの作り方
- 板書の方法
- 発音指導
- 文法の説明
- 和訳の指導の方法
- 日本語を中心にしなければならない授業の方法
- 学力差があるクラスの運営方法
- 50 分間の模擬授業
- 黒板での練習（大学の教室はホワイトボード）

(3) 2 つの研究の成果のまとめ

大学の英語教員養成課程では，英語教職の学生の指導力について，具体的に身に付けるべきスキルや知識が，学習指導要領で謳われていることを目標にしながらも，現場の実態も踏まえた上で，多様な学習を行っていく必要があることが，本研究から判明したと言える。しかし，一方で，英語力自体の養成とともに，これらの項目すべてを大学の授業で具体的に扱うことは難しい。そこで，学生の自律的な学習を促すプログラムの構築が望まれる。その１つの手法が，１つ目の研究で開発した EasyConc for Teacher Talk のような，ソフトウェアを使ったプログラムである。英語力に直接かかわる内容については，このプログラムで自律的に学習を行うことが可能である。また，このプログラムは，単に英語力を育成するためのものではなく，英語の指導力にも貢献することを想定して開発した。このプログラムでは，授業を英語で行う上で必要な英語の表現等を，指導する学年（中１～高 3）に紐づけて提示している。これにより，英語力と指導力の統合的な学習が可能になる。このプログラムを自律的に活用し，大学の実際の授業では，その他の指導力に関わる点の育成を重点的に行えば，英語教員としての能力を全体的に向上することが可能になる。本研究では，これを可能にするためのベースとなる，質問紙調査による課題の抽出および実際のプログラムの開発を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 工藤洋路・鈴木彩子・日臺滋之・松本博文	４．巻 61
２．論文標題 英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究とCan-doリスト作成の試み―4年次報告―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 玉川大学文学部紀要 論叢	６．最初と最後の頁 47-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤洋路・松岡まどか・和田朋子・長沼君主	４．巻 15
２．論文標題 資格・検定試験で求められるライティング力を授業でどう育むか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ELEC同友会英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村隆・岩瀬俊介・工藤洋路・鈴木千貴・牧野彰弘	４．巻 15
２．論文標題 中高における「話すことのパフォーマンステスト」の実態調査	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ELEC同友会英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 64-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太田洋	４．巻 67
２．論文標題 誌上研修　中学校英語お悩み相談	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿野幸一	４．巻 64
２．論文標題 中学校外国語　教科書題材を活かした深い学び－発問を通して生徒の思考を深める－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 指導と評価	６．最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿野幸一	４．巻 67
２．論文標題 英語教師として、どんな指導力を鍛えるか：今年の目標を設定しよう	５．発行年 2019年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 工藤洋路・鈴木彩子・日臺滋之・松本博文	４．巻 60
２．論文標題 英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究とCan-doリスト作成の試み―3年次報告―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 玉川大学文学部紀要　論叢	６．最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤洋路・木幡隆宏・和田朋子・松岡まどか・長沼君主・齋藤澄江	４．巻 14
２．論文標題 「対話的な学び」を引き起こすためのCollaborative Writingの在り方および具体的な指導例	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ELEC同友会英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 24-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 阿野幸一	４．巻 1204
２．論文標題 言葉として学ぶ外国語-「深い学び」のために-	５．発行年 2017年
３．雑誌名 学校教育（広島大学附属小学校　学校教育研究会）	６．最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 工藤洋路・鈴木彩子・日臺滋之・松本博文	４．巻 57
２．論文標題 英語教職課程の学生が修得すべきコンピテンシーの研究とCan-doリスト作成の試み―2年次報告―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 玉川大学文学部紀要　論叢	６．最初と最後の頁 61-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 工藤洋路・長沼君主・和田朋子	４．巻 13
２．論文標題 思考力を促進しながら実践するライティング活動の提案	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ELEC同友会英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日臺滋之	４．巻 65
２．論文標題 日英パラレルコーパスで補完する教科書の語彙指導	５．発行年 2017年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 日臺滋之	4．巻 33
2．論文標題 英語授業における教材の意義について考える	5．発行年 2016年
3．雑誌名 TEACHING ENGLISH NOW	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田洋	4．巻 65（8）
2．論文標題 教科書を使った英語力アップ法	5．発行年 2016年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計29件（うち招待講演　12件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 工藤洋路
2．発表標題 これからの外国語（英語）教育 ～小・中・高の有機的な繋がりに向けて～
3．学会等名 平成29・30年度川崎市外国語活動研究推進校報告会 講演（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 工藤洋路・内田諭
2．発表標題 英語学習者コーパス構築のためのタスク設計：特定の文法項目抽出に向けて
3．学会等名 英語コーパス学会 第44 回大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 工藤洋路・太田洋・阿野幸一・日臺滋之
２．発表標題 英語教職課程の学生の教育実習の実態調査―大学での指導と実習校での実践の矛盾―
３．学会等名 英語授業研究学会全国大会（第30回記念大会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masashi Negishi, Yoji Kudo, Yasuko Okabe, Yuko Kashimada, Mika Hama, Yuko Umakoshi
２．発表標題 Linking the Global Test of English Communication (GTEC) to CEFR Levels
３．学会等名 40th Language Testing Research Colloquium (LTRC)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 工藤洋路・松岡まどか・和田朋子・長沼君主・木幡隆宏・斎藤澄江
２．発表標題 資格・検定試験で求められるライティング力を授業でどう育むか
３．学会等名 ELEC同友会英語教育学会第24回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中村隆・岩瀬俊介・工藤洋路・鈴木千貴・牧野彰弘
２．発表標題 中高における「話すことのパフォーマンステスト」の実態調査
３．学会等名 ELEC同友会英語教育学会第24回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 これから求められる言語活動 ～話すこと・書くことに焦点を当てて～
３．学会等名 第20回関東地区高等学校英語教育研究協議会栃木大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 髙島英幸・村上美保子・今井典子・杉浦理恵・桐生直幸・工藤洋路・東野裕子
２．発表標題 小学校における課題解決型授業の学習状況の比較研究ー話す力と動機づけの観点からー
３．学会等名 日本児童英語教育学会（JASTEC）第39回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 酒井英樹・工藤洋路・島田英昭・小森真樹
２．発表標題 中学校における言語活動と英語力の自己評価や英語力との関係
３．学会等名 第48回中部地区英語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 草薙邦広・浦野研・工藤洋路・亘理陽一
２．発表標題 教師の授業中における英語使用：教育政策的エビデンス構築のための展望
３．学会等名 第48回中部地区英語教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 日臺滋之
２．発表標題 英語で言えなかった表現の定着を図る語彙指導―FlashCard（iOS用)の開発と活用―
３．学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 阿野幸一
２．発表標題 生徒が主体的に取り組む英語の授業作り
３．学会等名 愛知県英語教育研究大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 「新学習指導要領」で求められる英語教育へのアプローチ
３．学会等名 平成28・29年度 川崎市教育委員会 研究推進校 外国語（英語）科 研究報告会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 小学校における外国語（英語）科の指導の在り方
３．学会等名 平成29年度第１回下田市英語力向上プロジェクト講演会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路・日臺滋之・松本博文
２．発表標題 英語教員養成課程で学ぶ学生の能力や意識の変化についての調査
３．学会等名 JACET 56th International Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路・浜みか・岡部康子
２．発表標題 大学入試の4技能化が高校の英語指導にもたらす波及効果
３．学会等名 全国英語教育学会第43回島根研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 小学校英語科及び外国語活動の指導の在り方
３．学会等名 夏季特別講座「北海道弟子屈町英語科授業実践研修」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 これからの英語教育～「新学習指導要領」における小学校の外国語科を中心として～
３．学会等名 市川市夏季英語研修（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 ４技能を向上し学習意欲を高める言語活動の指導と評価
３．学会等名 福島県教育センター：生徒の学習意欲を高める英語科の言語活動における指導と評価実践講座（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoji Kudo, Mika Hama, Yasuko Okabe
２．発表標題 Change in college entrance exams and washback effects on teachers
３．学会等名 The 15th AsiaTEFL - 64th TEFLIN International Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 これからの小学校外国語教育
３．学会等名 川崎市小学校国際教育研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kouichi Ano
２．発表標題 Teacher Training in the Asian Context－Japan
３．学会等名 The 22nd Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 指導と評価の一体化～パフォーマンス評価について
３．学会等名 平成28年度群馬県英語教育研究協議会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 話すことの指導と評価
３．学会等名 平成28年度文部科学省委託事業「中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法に関する実証研究」第 1 回研修会（信州大学教育学部英語プロジェクト）（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 ライティング指導と評価の在り方
３．学会等名 神田外国語大学英語教育公開シンポジウム（「中学・高校における英語パフォーマンス評価の方法と課題」）（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yuko Koyama, Kouichi Ano, Takako Machimura
２．発表標題 How the Idea of International Understanding Can be Used in High School English Textbooks in Japan
３．学会等名 The 21st Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics
４．発表年 2016年

１．発表者名 酒井英樹・工藤洋路・福本優美子
２．発表標題 中高の英語指導に関する実態調査―教職経験年数の違いによる指導実態と意識の違い―
３．学会等名 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 工藤洋路
２．発表標題 中高生の英語学習に関する実態調査2014－学習実態と学習への意識の関係性などを探る－
３．学会等名 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 日臺滋之
２．発表標題 コミュニケーション能力育成のために―日英パラレルコーパスEasyConc.xlsmとEasyConc.fmp12の開発と活用について―
３．学会等名 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 工藤洋路	４．発行年 2018年
２．出版社 アルク	５．総ページ数 128
３．書名 自由英作文はじめの1冊	

1．著者名 阿野幸一・太田洋・萩原一郎・増渕素子	4．発行年 2017年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 165
3．書名 若手英語教師のためのお悩み解決BOOK	

1．著者名 阿野幸一・カレンヘドリック	4．発行年 2018年
2．出版社 NHK出版	5．総ページ数 280
3．書名 使いこなし　基本英単語	

1．著者名 阿野幸一	4．発行年 2018年
2．出版社 NHK出版	5．総ページ数 208
3．書名 使いこなし　中学英文法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	太田　洋 (OTA HIROSHI) (30409825)	東京家政大学・人文学部・教授 (32647)	
研究分担者	阿野　幸一 (ANO KOICHI) (70400596)	文教大学・国際学部・教授 (32408)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	日臺　滋之 (HIDAI SHIGEYUKI) (60459302)	玉川大学・文学部・教授 (32639)	